

審判の判定をめぐる葛藤価値検査からみた道徳性発達と 学習者行動との関係

—小学校 5年生バスケットボールの授業を対象として—

井場木 才紀 (和歌山大学)

1. 目的

本研究の目的は、葛藤価値検査からみた道徳性発達の違いと体育授業における学習者行動との関係を検討することである。

2. 研究方法

- 1)対象者：W 県下 T 小学校第 5 学年 2 学級
- 2)単元：バスケットボール (全 9 時間)
- 3)調査時期：2023 年 12 月 1 日～20 日
- 4)調査方法：審判の判定をめぐる葛藤価値検査を行い、道徳性の発達段階が高いと評価された児童 (以下、上位群) とそうでなかった児童 (以下、下位群) を各 6 名抽出した。そして、単元期間中の 2、5、8 時間目の授業を VTR に収録し、Siedentop (1979) の ALT-PE 観察法と上原 (2000) の語彙分析により、それぞれの学習者行動の違いを量的並びに質的に把握した。

3. 結果と考察

- 1) ALT-PE 観察法を用いた結果、全てのカテゴリにおいて群間に有意な差は認められなかった。しかし ALT-PE 値は、先行研究の態度得点の高いクラスと同程度の結果であった。
- 2) 語彙分析として文を構成するうえで主となる 5 つの語彙 (名詞、副詞、形容動詞、形容詞、動詞) を取り上げ、それぞれの内容から「主体的」「中間」「被主体的」に分類した (図 1)。その結果、全ての語彙において上位群は下位群に比して「主体的」な発言の多い結果が得られた。
- 3) それぞれの品詞が用いられた具体的発言の違いを質的に検討した結果、両群の間に差異が認められた。すなわち、上位群の児童は、「○○ (名前) めっちゃうまい!」「こうやったらできるよ!」など、自己や他者を認め、励まし、教え、支えようとする発言が、下位群の児童からは、「下手やからできやん」「悪いのは○○ (名前)

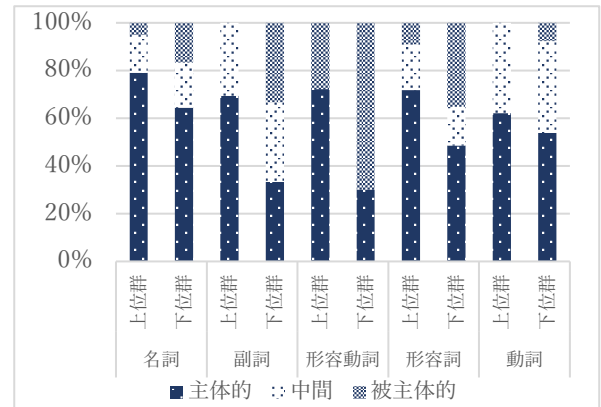


図 1 対象児童にみる品詞使用の比較

やん」など、思わず自己や他者を否定してしまう発言が、それぞれ多く認められた。

- 4) 道徳性の発達段階が向上した下位群の児童に対しては、動きを指導し、その出来栄を褒めたり認めたりする指導が有効と考えられた。

4. 結論

小学校 5 年生を対象に道徳性の発達段階の違いと体育授業における学習者行動との関係を検討した。その結果、両者の学習者行動の特徴には差異が認められた。すなわち、上位群の児童は自己や他者を認め、励まし、教え、支えるなどの仲間への積極的な関わりが、下位群の児童は自己の否定的な捉えから、受け身になりやすいことがそれぞれ特徴的であった。さらに、動きの指導と賞賛が下位群の児童の成功体験を積み重ね、結果的に道徳性の発達を促す可能性のあることが考えられた。

5. 主な参考文献

- 1) 伊勢優子, 体育における葛藤価値検査作成の試み—理由づけ分析による診断基準の妥当性の検討—, 鳴門教育大学卒業論文。
- 2) 上原禎弘, 小学校体育における教師の言語的相互作用に関する研究—走り幅跳び授業における品詞分析の結果を手がかりとして—, 体育学研究, 45, pp23-38。
- 3) 大西鉄之祐, 闘争の倫理—スポーツの本源を問う—, 中央公論新社。